

はべる
蝶の川原

神野麻郎

壁時計が五時半を指したので、門口浩三はそれまで忙しく動かししていた手を止め、班長の方をゆっくりうかがった。浩三がそうしているのをおそらくは気づいているはずだが、班長はいかにも自分は熱中しているのだというふうに、今縄で括りにかかっている奈良漬の丸い木箱に目を落とし、顔を上げそうもない。今日は機嫌が悪いのだ。機嫌の良いときは、五時半の五分ほども前から、「門口さん、もうええよ」と向こうの方から、笑顔まで作って声をかけてきたりするの。気まぐれなのだ。

今日の彼の不機嫌が、自分に向けられた悪意なのかそうではないのか、浩三には測りかねた。で、浩三としてはもうしばらく作業を続けながら、ほんの二、三メートル先の、神経質な横顔を時おりうかがっているしかない。いつものことや、いかげん気づいるやろうに。自分の方から声かけて帰ったるか。いや、そのところが実は微妙なんや、と浩三には思い返すことがある。

勤め始めのころ、浩三は五時半になると、班長に自分の方から声をかけて帰ろうとした。五時半までの勤務、残業はしなくてよいという条件でこの会社に再就職したのだから、それが当然だと思っていた。長く勤めた前の会社で、晴天の霹靂のような遠方への転勤命令が出て、それが事実上の解雇通告だと気づいた浩三は、それでもかなり悩んだ末思い切って退社して、旧友のついでこの酒造会社に入ったのだった。その面接のとき、提示された給与の額の低さも、工場内での立ち仕事が多いという条件も甘んじて呑み、ただ一つ自分の方から述べた希望が、残業はしないということだった。もう働き疲れた、働き詰めの生活はもうやめになりたい、とつくづくと思ったからだ。短かい面接の終わり際に、押し強くもない浩三がそうおぼろげといい出したとき、浩三よりもはるかに年下の人事課長は、「はあ？」と少し呆気にとられたような顔をした。それから気を取り直すように、「まあ、失礼ながらこのお歳ですし、その、うちの会社は残業も少ないほうですので。まあ、それで結構やと思います。いちおう、後で上司と相談してみます」

それで採用になったのだから、当然自分のささやかな希望は認められたものと思っていた。

ところが勤め始めて五、六日目、いつものように班長に挨拶して帰ろうとすると、呼び止められて、

「門口さん、今日は残業してやー」

周囲でやはり奈良漬の箱を括っていた四、五人の耳にも十分届く声だった。とっさに浩三が言葉を返せないでいると、班長はさらに語気を強めて、

「今日は仕事がつんどつてな。あんたもわかってはるやろ」

そう押された勢いで、浩三はつい、「はあ、わかりました」と折れてしまいそうになったが、待てよ、ここでいいなりになってしもうたら、今後もう押し返すことは容易ではなくなってしまうやろう、あの約束があるではないか、あれは自分としてはどうしても譲れない会社との契約なんやと思ひ直して、

「はあ。けど、残業せんというのが、会社との約束ですんで。すみませんが」と、周囲の者の反応を気にしながらも、少し力んでいい返したものだ。それが気色ばんだと映ったか、あるいは会社を引き合いに出されて自分の威厳が損なわれたとでも思ったか、

「そうでつか。皆が忙しいしてるのにな。わかりました。では、もうよろし」といい放つ調子が尖っていた。その冷たい反応が黙々と手仕事を続けている同僚たちの背中や横顔にもたちまち伝染したように感じられ、一人責めたてられているようだった。しかし気を持ち直し、

「すみませんな。では、お先に」といい置くだけで、そのときは持ち場を離れたのだった。そういうことがあった。そしてその後、班長から再び残業をいい付けられたことはない。

しかし、班で浩三ただ一人が残業をしないことに班長が陰口を叩いていることは知っていたし、またとくに終業間際に、班長が浩三に対して意識的になっていることもわかった。で、その後は浩三の方から、「では、お先に」といい出しにくくなった。そしていつしか、「門口さん、もうええよ」と班長から声がかかるのを待つ姿勢になってしまった。浩三の方からいい出すよりは、「もうええよ」と許可を与えるかたちのほうがまだしも上司の威厳を保てると班長は思っているふうなのだ。

終業時刻の、そういうささいな習慣が定着してもう二年ほどになる。時々浩三は、午後四時ごろになると「ほな、帰らしてもらいます」「お疲れさん」と屈託のない声を口々にかけあって波が引いていくようにさつさと帰っていく。パートの主婦たちをうらやみ、自分もあんなぐあいではいいはずだが、と自分のふがいなさを悔やんだり、班長の度量の狭さに小腹を立てたりするが、しかしそれくらいのささやかな不愉快をやりすごすことで自分の生活の型が守れるのやつたら、まあよいではないか、と思ひ返すのが常だった。

五時半を十分も過ぎて、やっと班長が、

「門口さん、もうええよ」

顔を上げもせず、ぶつきらぼうな調子だ。

「はあ、ではお先に」と答えて、浩三は今手にかけている箱を一つ括り上げてしまい、背後の箱の山に積み上げた。奈良漬も今ではほとんどがビニールの真空パックの製品に変わったが、昔ながらの香りのよい木箱を珍重する顧客もいるらしく、その製造が浩三たちの

班の仕事の一部になっている。流れ作業による真空パックとちがいで、木箱のほうは箱詰めも一つ一つ手作業で、最後に表装紙を蓋の上に置き、縄でかたちよく括り上げる。

浩三は作業机の上の縄の束やら表装紙やらを手早くかたづけしておいてから、もう一度「お先に」といい置いてその場を離れた。背中に、「お疲れー」と、感情のこもらない声が二三かかった。

休憩所内のロッカーの前に行って、着替えをする。いつもなら着替えた後にお茶を一杯すすって一服するのだが、今日は少し遅くなったのでそれはやめにした。

肩に黒いバッグ一つを掛けて、浩三はほかには誰もいない休憩所を出る。工場を出るところで事務所の中に声をかけると、パソコンの前でうつ向いて何かの雑誌を読んでいた受付の若い女が、ほんの一瞬、二十度ばかり顔を上げ、すぐまたうつ向き、それからようやく聞き取れるくらい声で、「お疲れさま」という。ありがたくも、その娘の茶髪のつむじを押しながらそこを通過することになるわけだった。何という態度や、と浩三は舌打ちする。かわいげがないどころか、人への対し方を知らん。あれでよう会社の受付が勤まるもんや。若い男の職員の前ではしなをつくったり、手入れにおそろしく長い時間をかけているにちがいない髪を指で梳く、得意のポーズをとってみせたりするのにな。いや、あの娘ばかりではないわ、このごろの娘たちとゆうたら、自己中心的で恥を知らん、まるで他人への思いやりちゅうもんがないわ……と、酒造会社のまっ白な土堀ぶたいに歩きながら、浩三は受付嬢のつむじへの反発から始まったもの思いにいつしかとらわれている。

たとえば、だ。街を歩いていて若い女とふと目が合っても、露骨に視線を逸らされることとがしばしばある。それはまだいい。まだいいとしても、その逸らし方がまるで汚いものから目をそむけたというぐあいやから癩にさわる。なるほど今おまえはそんなにつくろつて、自分ではきれい、かわいいと思ってるのかもしれない。けどそれがいったい何ほどのことやというんや。どうしておまえが今、そんなけっこうな暮しできとるんか、けっこうな教育も受けてこられたんか、少しは頭を使って考えてもみよ。おまえたちの親やその上の世代の者たちがなりふりかまわず懸命に働いてきたからではないか。それくらいのことがかれへんのか、いったい学校で何を習ってきたんや。

ついこの間のことだが、隣りの都市の地下鉄駅構内の階段で、深夜に若いOLの二人連れが浮浪者ふうの男に刃物で殺傷されるという事件があった。休日の昼、たまたま浩三がテレビを見ていると、被害者の顔写真や犯人の男が連行されるシーンが映し出され、そして次に化粧の濃い女性レポーターが登場して、

「被害者の〇〇子さんのご冥福を心からお祈りいたします。……え、もう、私は、このよくな通り魔犯罪はゼツタイに許すことができせん！犯人の男は憎んでも憎みたりません。通りがかりに無差別に襲うなんて、女性はおちおち道も歩けないではありませんか！世の男性方は、もっと女性を守るべきです。皆さん、そうではないでしょうか！私は、関係当

局に、地下鉄駅構内の警備強化と異常者の摘発を、断固強く要望します……」などと涙まで浮かべてみせながら金切り声をあげていた。

犯人というのは、風采の上がない、もう初老を過ぎた男である。それを見ていて、浩三の頭には、事情には通じないながらもつい想像が広がったものだ。人通りまれな深夜の地下鉄構内の階段、うらぶれたその男とはなやかに装ったOL二人連れがすれちがう。ふとうちの一人が男と目を合わせたたん、しゃくるように頭を振り、露骨にあらぬ方へ視線を逸らす、汚いものを見たときでもいうように。瞬間、男は何だこいつらは、と向かつ腹を立てる。その怒りの火が、男の腹に日ごろたまっていた娘たちへの憎悪、日々いわれなき侮蔑を与えられるゆえの憎悪のガスに引火し、爆発する。男は発作的に何かわめきながら女たちを追いかけ、懐に呑んでいた包丁で女たちに切りつける……。浩三にはその男の暗い感情の動きが手に取るようにわかる気がしたのだ。

男の行為はそれは悪い、とんでもない、許されてよい行為ではないわ。そやけどしかし、娘たちの日々のいわれなき侮蔑も許されてよいわけはない……。

だがもちろん浩三に、会社の受付嬢や街の娘を呼び止めてそんなことをくどくどと意見してみるだけの気力があるわけではない。娘といえば、浩三自身の、今は嫁いでいる二人の妻の娘も、人間としてよく育てたという自信が浩三にあるわけでもない……。

腹立ちが、そう煮えきらぬ思いにまで沈んでしまうと、浩三は今となっては何事も諦めるしかないんやな、と常の思いに戻ってゆく。娘たちが変わったのは、世の中が変わったからや。世の中が変わったゆうことは、人間全部が変わってしまったゆうことや。そしてこの大きな変わりようは、間違えて坂を転がりはじめた無人のトラックみたいなもんで、今さらもう誰にも止められへん。そして、知らず知らずのうちに、みんな破壊へと向こうとんのやろう。みんな、仕事に、遊びに、あくせくあくせくしながら……。

酒造会社の並んでいる浜手から、北側の衝立のような山並みの方へ向かってしばらく歩くと、やがて高架になっていく私鉄の駅に出る。その駅前のターミナルから浩三の住む山の中腹の団地までバスが出ているが、この日浩三はそのターミナルから違う系統のバスに乗った。それは昨夜から考えていた予定の行動である。雨が三日続けて降ったので、あの場所が気にかかっていた。

バスは学生や勤め帰りの乗客を満載して、しばらくまともに西陽を浴びながらにぎやかな国道を走り、それから北へと折れ曲がってあえぎあえぎ坂道を登りはじめた。やがて高台の住宅地に入り、停留所で五人、十人と客を吐き出しながら、さらに北側の山に向かつて蛇行していくと、前方の高みに全体に銀メッキをほどこしたような変電所の施設が見えてくる。その手前が終点で、そこまで這い上がったバスは、葉っぱの上に登りつめたテントウムシみたいに動きを止め、エンジン音を控えた。そこで七、八人の乗客に混じって降車した浩三は、山沿いの道を歩きだしながら高台からの眺めに目をやる。山の斜面を這い

のぼってくる街の触手のようやく尽きるそのあたりからは、海沿いに細長く開けた都市が一望のもとで、さつきまで浩三が働いていた浜の工場あたりも、大気の薄い濁りの中にそれと見分けられる。ちょうど夏至のころで、陽はまだ斜めから強い光を街や港の上に降り注ぎ、濃い影をつくっていた。

浩三がたどる山沿いの道は、やがて行き止まりのガードレールに突き当たった。その下は崖になっていて、川原には薄闇がたまり、流れの筋が白い。浩三はガードレールのわきから、その川原への急勾配の小道を注意深く下りていった。その、住宅地の横手のさほど広くもない川原の一隅が浩三の目ざす場所である。そこには粗い竹垣で囲われた畑があった。

畑は三枚ほどある。そのうちの一番道に近い側の、四、五坪ほどの広さが浩三のものだった。そこには今、ナス・ピーマン・インゲンマメなどの夏野菜、テッポウユリ・スイトピー・キンセンカなどの花が植わっている。隣の二つの畑にも同じように青々とした夏野菜や季節の花が育っていた。雨が三日間断続的に降り続いて川は水かさを増していたが、幸い畑には影響がなかった。浩三はひとまず安堵して、バッグの中から軍手と足袋を取り出し、また崖そばの木の茂みに据えた小型のスチール製の倉庫からクワとカマを出して、雨で荒れた畑土を整え、雑草を除きにかかった。

それから一時間余り、日がとっぷりと暮れるまで浩三は作業に集中した。除草がすむと屈み込み、葉を一枚一枚調べて害虫を除いた。時々ぶつぶつと口の中でつぶやくのは、作物に語りかけるいつもの癖である。夕刻の人氣ない川原で、浩三はそうして野菜や花との親和的気分になることができた。砂がちでしかも日当りも悪いその川原の畑では、さほど上等の作物ができるわけではないが、それでも浩三は満足だった。そうして一人無心に土をいじっていると、遠い懐かしい記憶に触れる思いがした。

浩三がそうして川原に野菜や花を作りはじめたのは、ほんの偶然からのことである。もう五年ほど前のことになるが、春の初めに胃を患って一カ月ばかり入院加療を受け、その後しばらく静養をかねて自宅で過ごしたことがある。そのとき医師にも勧められ、ふだんは習慣のない散歩を毎日試みた。そしてある日、気分がよいのでいつもより遠出をしたときに、その川原の畑を見つけたのだった。

この、山と海に挟まれた坂の街には、背後の山系から海へと流れ下る短かい河川がいくつもある。その川もそうしたものの一つで、浩三もふだんは気にも留めていなかった。しかし、この街の川のほとんどすべてが治水や補修の名目で川底までコンクリートや石で固められ、たんなる人工的な溝に変えられてしまった中で、その川だけはほぼ自然のかたちを残しているようだった。いや、その川だって、その高台の住宅地を百メートルも下れば、もう石敷きの変哲もない姿に変えられていることを浩三は知っている。またその上流の方も、砂防ダムに塞がれるなどしてあられもない姿なのだ。が、たまたま浩三が覗いたあた

りだけが、まだ川床も自然のまま、川の岩場も対岸のやや深い森のようすも昔ながらのものを見た。

そして、その川原の片側に、悠々と花や野菜の畑が作られていたのだった。崖の上から眺め下ろしながら、浩三には、これはほとんど奇跡的なことだとさえ思えた。こんな住宅の立て込んだ街なのか、おそらくは私有地ではなく市有地である場所に、堂々と畑なんかを作ってる奴がおる！驚きはたちまち感動に変わっていった。そして、できることなら自分もああして堂々とやってみたいものだと考えた。

その考えに取り憑かれ、何度もその川原に出かけてみるたびに、ますます願望は強くなつた。ガードレールのわきに小道を見つけて崖を下りてみると、さして広くもない川原の片側に、竹垣に仕切られて二枚の畑がある。たぶん二人の人間が作っているのだろう。しかし、そのそばには狭いがまだ畑になりそうな草場が残っているのだった。そこは崖から伸び出た木々の陰になって日当たりは悪そう、土地もいくぶん低い、枝を少し刈り、整地をすれば何とかやれるだろう。

そう見てとると、浩三は矢も盾もたまず、その思いつきを実現しにかかった。まずホームセンターへ行って、園芸用品一式と思いつくままにいくらかの種や球根を買い揃えた。そしてその勢いですぐにも川原へ出かけ、自分の畑を開墾にかかりたかったのだが、ふと、待てよ、とためらいが兆した。開墾するにしても、やはり先の占有者の許可を得ておく必要があるのではないやろか。いや、市有地のはずやから「許可を得る」というのもおかしな話やが、やはり先の占有者に一言挨拶しておくのがこういう場合の礼儀というもんやろ。その方が後々のためでもある、そういう思慮が働いたのだ。が、では話し合おうとしても、いったいその畑たちの占有主がいったいどの誰なのか、皆目見当のつくことではなかった。まさか、区役所に問い合わせるわけにもゆくまい。付近の住民に訊けることでもない。思案の末、浩三は辛抱強く川原で待つことにした。いつかその占有主がそこに現れることは間違いないのだから。

それから浩三は、暇のあるたびにその川原へ出かけ、畑を眺めながら坐っていた。

奥の方の三十センチほど石垣を積んで一段高くなった広い畑は花好きの男の手になるらしく、フリージアやデージー、さらにヒナゲシに似た可憐な花などが咲き乱れていた。手前の狭い畑はバレイショやコカブなどもっぱら野菜を作っていて、実用的な性格の男なのかもしれない。しかし、奥の畑に比べて手前の畑は雑草も混じり、何となく荒れた感じがするのはこれも作り手の性格を現しているのか、それともその男が忙しいか遠くに住んでいるかで手入れが行き届かないからか、自分ならこうもする、ああもしてやるんやが……などと畑を眺め、いろいろと想像をふくらませているのが楽しかった。浩三にはこうした畑作りはいかにもやさしい趣味と見えたので、想像の中で、畑の主たちをいつの間にか男と、それも自分と同じような年恰好の、自分と同じように苦労を積み、そして今や多少、

いやだいぶ、うらぶれた男と決めてかかっていた。

畑の主の一人には案外早く会うことができた。それはうらかな休日の朝だったが、浩三がすでに通いなれた道をゆっくりたどって崖の上まで来ると、男が一人、畑にうづくまり、コテを使っているのが見えた。やっと見つけた、と浩三は川原に下り、その男に近づいていった。そして旧友にめぐり会ったような親しい気分で、

「あのう、ちよつとものを訊ねますが」と男の背に話しかけた。

「はあ、何か」とゆつくり振り向いた男は、しかし浩三が想像していたよりはずっと若く、しかもうらぶれたというよりはむしろ闊達なふうだった。洒落たジャンパーにストラックスを着こなしてゴルフ帽をかぶり、どう見ても大きな会社に勤めるサラリーマンが休日に遊びに出たというふうである。意外の感に打たれながらも、浩三は考えていたとおりに作物の種類や作柄についていくつか訊ねてみ、そして畑を褒め、その後で、

「実は自分もね、こっちの空いてる所に花や野菜を作ってみたいのやが。どうやろうね、迷惑かね」と切り出してみた。すると男は軽快な調子で、

「迷惑なんていっこうに。それはあなたのご自由ですよ。もともと誰の土地でもないのですからね。ぼくもまあ、ふと思いついて、ほんの二、三年前からやりだしたにすぎません。こんな所を、ただ遊ばせておくのはもったいない気がしたものですからねえ。まあ、もの好きでやってます。……ああ、そこですか、そこならよい畑になるでしょう。ちよつとその木の枝を切つて、日当たりをよくしたら。ただ、ここはまったくの天候まかせですからねえ。つまり、雨ですわ。大雨でも降って増水すると、何もかもワヤですわ。ほら、去年の梅雨時はひどく降ったことがあったでしょう。せつかく春から育てたものを、全部ダメにしましたよ」といって、屈託なげに笑った。浩三もつられて笑いながら、まるで気ままな趣味といったふうだな、この男はこんな調子で別の休日にはゴルフなんかにも出かけるのだろうな、と想像した。それよりもとかく、何日か思い続けてきた自分の畑が実現しそうなことに安堵し、喜んだ。

男の軽快な調子に乗るかたちで、その後も浩三はいろいろと訊ねてみた。男によると、自分は手前の方の野菜畑を作っているが、奥の方の花畑の主はかなり歳とった男で、畑もだいぶ年季が入っているということだった。その「大将」（男はその畑の主をこう呼んだ）は早朝手入れに来るらしく、男も畑では二、三度しか会ったことがないということだった。が、近所に住んでいるのか顔見知りのようでもあった。「大将」はもともとこの辺の裕福な地主の息子だったそうだ。けれども長年の間に事業に失敗するなどして土地を次々に手放し、今は近くのマンションでこじんまりと暮しながら、昔の暮しを懐かしがってここに畑を作り、またほかの川原にも何枚か持っているらしい。

「無口で、ちよつと変わってますが、いい人ですよ」と男は付け加えた。聞いていて浩三は、なるほどそれはいい人にちがいなさう、やはり自分が想像してたような男がその畑

の主やったんやと合点した。

それからも男は親切で、入れるべき土や肥料の種類とか、それらを手に入れるのにごこの店が安いとか、いろいろと教えてくれた。その日はまず、宝物を手中にしたようなよい気分になって浩三は帰宅した。そして夜の間、あそこはやっぱり花畑にしようよと決めた。蝶のさかんに舞う一面花畑の川原を夢想しながら床につき、その夜は子供のようによろこびながら寝つきが悪かった。

早速次の日に不足していたものを買い整え、また肥料や土やかさばる道具類を店から直接川のそばまで運んでもらい、開墾にかかった。思えば四十年以上もシャベルやクワをまともに手に取ったことがなかった。遠い記憶を少しづつ呼びもどすように、浩三は丁寧にシャベルで土を起し、クワで畝をこしらえた。そうしていると土の響きを受け止める足腰からまず昔の感触を取りもどしてくるようだった。そうして春からの丹精で、その年は夏の花、秋の花をその川端の畑にまず思いどおりに咲かせることができたのだ。

浩三の故郷は九州よりはるか南方の小さな島である。珊瑚礁の隆起によってできた平らな島で、戦前からサトウキビのほかフリージアやテッポウユリなどの花を栽培し、それらの球根をアメリカや本土に出荷して島びとの暮らしを支えていた。だから浩三の子供のころの記憶にも、貧しく質素に暮す島びとと美しい花畑の景色がある調和をもって焼きついている。とくに仲春や真夏には平らな島一面が緑と花の鮮やかな色で埋まり、それが蒼い海と対照をなす楽園のような風景の中で、親たちは働き、子供たちは育った。浩三も子供のころから自然に畑仕事や育牛を手伝った。もともと、その時代は戦前戦後の食糧事情の悪いころにも重なっていたので、花畑はイモ畑などに変えられ、痩せた野菜を穫つてようやく食いつないだという辛い経験もした。

戦後の混乱が収まったころ、中学を卒業した浩三は、他の多くの同級生と同様に島を出、身内を頼って、島からの船も着岸するこの港街にやってきた。以来、幾度か仕事を変えたが、二十歳のころには幼馴染の美江と、下町の六畳一間のアパートに同棲しだした。それが結婚生活のスタートだった。

何度目かに就職したのは、電気部品製造の下請けの小さな会社だったが、それがやがて世の中の好景気の時運にうまく乗ってひとかどの中堅企業へと成長していくうち、浩三の地位や給料もおのずと上がり、どうやら人並みの暮らしができるようになった。二人の娘も授かり、二十五年ほど前には今の団地の家を購入して、以後も、仕事も家庭もまずたいした波乱なくやってこられたつもりだった。

それが二年前、突然解雇通告に等しい遠地への転勤の辞令を受けた。四十年近くも会社のためにまじめに働いてきた果てにこの扱いを受けるかと、浩三はつくづく会社組織の無情を悟り、憤りもしたが、また一方で猛スピードで進む業界の技術革新にすでにすっかり

取り残されている自身をも省みざるをえなかった。それで、そろそろ潮時かとの諦めの氣持ちもついて、妻と二人の老後の資金としては心もとない額の退職金を受け取り、会社を去った。再就職の先は、元の会社の口利きでそれまで身につけたノウハウを多少生かせる口もあつたのだが、もう会社に扱き使われるのは御免だという氣持ちが強く、それまでの仕事とは何のゆかりもないが住まいからは近い、今の酒造会社に落ち着いたのだった。そこではほとんど一日中、食品部の工場でただ奈良漬をこしらえていればよかった。

若い時には何の未練もなく島を飛び出した浩三だったが、歳を重ねるごとに昔の島の生活に懐かしむ氣持ちがさすがに勝ってきた。この、海に面した開放的な都会での暮しにくくに不満をもつのではなかったが、しかし異郷はやはりいつまでも異郷で、根拠なく浮遊している感覚を消せなかった。とはいえ、老残の身で今さら島に帰ろうとも、帰れるとも思わない。元来、あまり人付き合いの好きなほうではない浩三は、今までも島に住む親類らと積極的に付き合い合おうとはしてこなかった。島にも、もう十数年も前、親の葬儀に帰つたきりである。そんなふうだったので、島の者との関係が疎遠になつてしまつたのはやむをえない。そして浩三は、それをべつだん淋しいこととも思つていなかった。

妻は、別だ。妻の美江は、定期に島に帰ることはしないまでも、今でも手紙や電話で実家や親類らとの連絡を欠かさない。島の産物が宅急便で送られてくれば、すぐに街の名物を送り返すといったぐあいだ、家の中には黒糖や野菜など島の産物の途切れることがないくらいだ。また美江はこの都市にある島出身者の郷土会にも、年に何度かはそれなりに装つて楽しそうに出かけてゆく。なぜそんなに忘れもせず、飽きもせず遠い島や島人と交わりのたがるのか、若い時の浩三には不思議に思えたこともあつたが、それも年老いてくるとわからないではない。懐かしいのだ。そして、ゆくりなくも島から離れ、やがて遠い異郷に骨を埋めることになるだろう自分自身がいとおしいのだ。「月見ると島を思い出すわ」と今でも美江はよくいう。そして、「月見りや昔 忘りゆらでしりや 思どうまさる 忘りならむ」など、島で昔、月の晩、若い男女が浜に出て三線さんしんに合わせてにぎやかに歌い踊つたモーアシビのときの恋歌を口ずさみ、時には涙ぐんだりもしている。

美江によればわりにさかんらしい郷土会にも、浩三は今さら顔を出してみようとは思わない。妻やそこに集う人々とは故郷を懐かしむかたちが違うのだと思つている。島出身者同士で実際に顔つき合せて交わるのもひとつのかたちなら、一人で島の幻を夢見ているのも別の一つのかたちにならう。

川原の畑を花で埋めようと思いついた動機が、その島の幻にあることは浩三自身も意識した。むろん、全島花畑の幻を見るためには、川原の畑はいかにもちっぽけで貧相極まりない。だが一年目は春から丹精して、夏にアマリス・サルビア・マーガレット・ヒマワリ、秋にガーベラ・サフラン・ベゴニアなどを咲かせたときには、浩三の目にたしかに幻の花の島が見えたのだ。異郷のごくささやかな花畑を窓として、故郷の花畑が髣髴と眼前

に浮かび上がるような気がしたのだった。

そのとき浩三は、美江をここに連れてきて見せてやりたいという衝動に駆られた。川原での畑作りという考えに取り憑かれて以来、勝手に園芸道具や肥料・種などを買い込んできてはそれらを持っていそいそとどこかへ出かけてゆく夫を美江は不審がり、いろいろ訊ねてきたものだが、浩三はろくに返事をしなかった。ただ、「近くに、タダで借りられる畑があつたんや」と説明したばかりで、その場所すらも教えなかった。美江に限らず誰かにそこを知られてしまうと、せつかく紡ぎはじめた壊れやすげな夢がもろくも崩れてしまうような気がしたのだ。そのことを思い出し、浩三は美江を花畑に連れてくるという思いつきを諦めた。その代わり、「わしの畑でできたんや」といささか誇らしく切花を美江に渡した。きよんとした美江は、それでも「まあ、どこの畑か知らんけども、きれいに咲かせたもんやねえ」といつて花と浩三を見くらべながら笑った。

二年目も花ばかりを作った。フリージアやマーガレットの越冬のために、畑の一隅にビニール張りのフレームも作り、休日や勤め帰りにこまめに立ち寄って世話をした。この年は、島でよく栽培しているフリージアとテッポウユリがよく咲いた。三年目は花を半分にして、試みに春夏はナス・ピーマン・インゲンマメ、秋冬にはレタス・ハクサイ・ダイコンなどの野菜を作ってみた。花は思いどおりに咲いたが、やはり日当たりが悪いせいか、野菜は徒長したり虫がついたり枯れたりしてうまくいかなかった。その年に会社を替わったのだったが、替わってからはいよいよ川原の畑作りに熱を入れるようになり、去年もまた花と野菜を半分ずつ、そして今年は花を減らして野菜を多く試みようとしている。近ごろ美江が、近郊の農家から共同購入をする主婦グループに影響されて無農薬野菜をしきりに重宝がるからだだった。

浩三の畑では、野菜に農薬を用いたことは一度もない。その代わり、休日には晴雨にかかわらず朝から出かけて精を出し、週日もとくに晩春から初夏にかけての繁忙期には足しげく勤め帰りに立ち寄って日没まで世話をした。わずかな面積の畑でも、種蒔きから始まって植えつけ・水やり・草取り・虫取り・中耕・追肥・収穫、また整枝や支柱作りと、作物の成長に追われるように作業は次々と生まれてけつこう忙しいのだった。

野菜や花は、育ててみるとやはり生き物なのだった。それも、目も耳もある人間の子供に似ている。かわいがるとすましているが、少し手を抜くとそっぽを向く。媚びてもくるし、反抗もする。辛抱強いのがやたら高慢ちきのがやたらと手をかけさせるのがやたら、種類によつて個性もさまざまだ。そして彼らは一樣に川原の畑にひっそりとたたずんで、親代わりの浩三が来るのをいつも首を長くして待っているといったふうなのだ。畑に着くと、浩三はおのずと彼らに無沙汰をわび、機嫌を訊ねたくなる。で、いつの間にか、ぶつぶつとものをいいながら作業するのが癖になった。

中の畑（と浩三は勝手に呼んでいる）の男とは、休日にたびたび顔を合わせ、四方山話

をした。だが、この五年の間に、男は急に老けこんだ。初めの軽快で闊達なようすはしだいに消え、重く疲れた表情を見せるようになった。顔の艶が失せ、髪が薄くなり、動作も緩慢になった。男は身辺のことはあまり話題にしたがらなかったが、それでもぼつぼつと不機嫌な顔つきで洩らすことから察すると、男はその数年の間に離婚を経験し、また会社ではリストラも相次いで仕事のストレスも増えたようだった。

男の生活の変化に合わせるように、中の畑も荒れていくのが目に見えてわかった。もともと乱雑に野菜を作っていたのだが、めったに世話をしに來ないので地味が痩せ、虫がつき、雑草がはびこるままになった。見かねて浩三は、時々その手入れもしてやった。次に久しぶりに会うと、男は浩三の親切をわかって素直に礼をいった。そんなことがたびたび続くようになった。

それで、今年の春の話だ。これから播種だという時期、会うと男は浩三に、「門口さん。正式にね、ぼくの畑を作ってもらえませんか？で、収穫は折半ということですよ。いや、ぼくの方は三分の一でもかまわないですが」と持ちかけてきた。「正式に」というのもおかしな話だが、と浩三は初め聞いたが、男が言葉を継ぐのによれば、自分は今身辺多事でなかなか畑にまで手が回らない。それなら思い切って放棄すべきなのだが、自分としてはもう七年間もここを耕作してきたわけではあるし、愛着がある。自分で育てて収穫して食膳に載せる野菜の味もまた忘れがたい。いずれはまた精出せる時が来るだろうから、それまで一旦預かりのようになかたちで世話をしてもらえまいか、たまには自分も世話をしに來ますから、というのだった。それを聞いて浩三は、地主に土地を借りる小作のような妙な感じではあるが、もともと自分は後から作り出したのでもあり、また仮りにでも自分の畑が広がることに魅力も感じ、即座に承諾したのだった。

で、今年浩三は中の畑も作っている。中の畑は五坪ほどで、作付けは男の注文どおりやはりナス・キュウリ・ピーマン・バレイショなどの野菜である。自分の畑と合わせると十坪ほどになり、これなら奥の畑にも伍す規模でなかなか立派なものだ、と浩三は誇らしかった。自分の畑と中の畑の間にはまだ仕切りをしてあるが、男の近ごろのようすでは案外早くこの仕切りを取り払ってしまうことができるかもしれない、とひそかに期待したりもした。

奥の「大将」の畑は健在である。いつ見ても手入れが行き届き、季節ごとの花をみごとに咲かせて浩三を感心させた。この五年の間に、浩三は二度ほどその大将に出会ったことがある。初めは中の畑の男が話す大将に一度会ってみたくなくて、ある夏の早朝出かけてみたときだった。

崖の上から見下ろすと、ちょうど大将らしき老爺が何か活発に声を出しながら奥の畑を精力的に動いている。その出で立ちが変わっていて、真つ青の、袖がなく上から下までつながったいわば冠頭衣のようなものをぎくつと被っただけである。ツルンとした年季の入

った禿頭も、立派な体格もまるで弁慶のような入道を思わせた。なるほど「大将」にちがいないと浩三は思わず微笑を漏らしたものだ。そして大将は一人ではなく、こちらは痩せた六十がらみの女が付き従っていて、大将の連発する命令のとおり忠実に動いているようだった。

浩三は川原に下りて行って二人に向かい、自分はこちらの畑を作らせてもらっている者で……と、あたかも領地を分け与えられている家来分のような調子で挨拶した。大将は剪定バサミの手をちよつと止めて大きな目をぎよろりと剥き、ただ、「ほおっ」と一声吼えるようにいっただけで、後は浩三に目もくれようとせず、またせわしげにハサミをこねりはじめた。そうしながら次々に大声の指示を女の方にとばし、女の方はかしこまったふうで忠実な召使よろしく右に左に動く。まるで戦場のようだと浩三はしばらく呆気にとられていたが、そのうち女の方から丁寧な口調で話しかけてきたので、浩三もやつと自分の存在が認められたような気になって今年の天候や作柄など畑にまつわるさしさわりのない話をした。女は大将のことを、「社長」と呼んでいた。浩三のそばに来たとき小声で女は、「もと建設会社の社長さんでしたから」と説明した。

その社長は、しゃがむと青い服の下には何もつけていない。まだ太く脂ぎった両腿の間に一物が堂々と垂れ下がっていた。浩三が自分の畑に取りかかったとき、「帰るぞー」と一声吼えて大将はそそくさと小道の方へ歩いていく。畑の奥のスチール製の立派な倉庫に肥料や道具類をしまっていた女が、慌てて浩三の方に挨拶しながら小走りに後を追った。すると道の上の方から、

「去年のユリはよかったぞー」という太い声が、浩三の頭の上に落ちてきた。

二度目に顔を合わせたのはある休日、たまたま手入れに時間がかかったのか、浩三がいつもどおり遅い朝食の後で出かけてみると、やはり青い冠頭衣を被った大将と以前の女がいた。そのときも大将と話はしなかったが、帰り際に大将の方から近寄ってきて、にやりと笑い、

「あんた、これ、やるわ。どや、みごとなもんじやろう」と、今切り取ったばかりの深紅と黄の大輪ガーベラを浩三の鼻先に突き出した。そして、

「あんたの畑も、よう丹精しとる。えらいもんじや。こつちを作つとつた若造はあかなんだが。何事も気まぐれでやつたらあかんわな。あんた、もつと花を作れ。花がええ、おお、花がええぞう」といい置くと去っていった。託宣を垂れるような調子だった。

今年の野菜は春からの丹精でなかなかできがよかった。秋植えのワケギやネギが寒い間も取れたし、夏のナス・ピーマン・オクラ・インゲンマメも上々のできだった。手間のかかるキュウリやトマトも入念にポリマルチを敷きつめたり、敷き藁をしたりして、今のところは順調に育ち、七月からはぼつぼつと収穫が期待できそうだ。去年の夏はニンジンと

トマトの根がすっかり土中の害虫にやられてしまったが、今年は知識を得てそばにマリーゴールドを植えたせいも、二つとも勢いがよかった。やっと野菜作りが板についてきた感じで、浩三は満足だった。

ところが、雨の後手入れに行った週の次の日曜日、また雨の来そうな曇天の下を川原に出かけた浩三は、目を剥くような光景に出会った。浩三の畑と水流の間の、一坪ほどもない窮屈な場所が新しく鋤き返され、しかも境の竹垣が勝手に移されて浩三の畑の裾がかなり侵蝕されていたのだ。そればかりか、その侵蝕された部分に生えていたキュウリとニンジンの一部は、無残にも引き抜かれ、浩三の畑の他の作物の上に棄てられていた。丁寧に敷いていた布団を、いきなり乱暴にめくり返されたぐあいだった。はじめ、夢でも見ているようにぼかんとしていた浩三の胸に、急速に怒りが沸騰した。

以前にも何度か、畑の一部が踏み荒らされたり、花や野菜がぼつぼつと盗まれていたことはある。それも腹立たしかったが、しかし自分もこんな川原に勝手に作っているのだからある程度の被害はやむをえない、散歩の人や子供のいたずらか不注意だろう、とそんなときは諦めもついた。だが今の場合は違う。人の畑の一部を奪い、しかも人が丹精込めた野菜をこれ見よがしに引き抜き打ち棄てていくとは……。こんな無法が許されてよいはずがない、どこのどいつめや、この無礼者は！と、激しい気持ちにとらわれるままに、その闖入者の新しい畑を踏み潰そうとした。が、その強いて挑んでくるような不敵なやり方に恐れも感じ、思案の末、ともかく自分の領分への侵入は許せないと竹垣をもとの位置に戻し、失われた尻尾を回復するようにクワやコテで自分の畝を作り戻した。すると、無法者の畑はいかにも小さい、ひしゃげた形になった。

その日はそれで帰った。だがそれから二日後、気になって勤め帰りに寄ってみると、またぞろ前のように竹垣がすぐ替えられ、浩三の畝が侵蝕されていたのだ。しかも今度は前よりも広く、四、五坪ほどの浩三の畑の半分近くが削がれ、そこに育っていたニンジン・カボチャはかき消えていた。よく見ると、川岸の茂みのかげにそれら幼いものたちが打ち棄てられてあり、熟した根や実はなかった。そのしわざ、窮屈な場所に他人を蹴散らしても尻を入れてくるようなそのやり方に、浩三ははつきりと、これは闘いや、と悟った。そして何かの苗が植わっている敵の畑に踏み入り、めちやくちやに踏み潰した。竹垣をもとの所に移し変えた。

そうしておいてもまだ凶暴な気持ちをなだめようがなかった。敵に冒されたのは、ただの小さな畑にすぎないのではなかった。何か自分が今まで必死に守り支えてきたもの、それはたんに畑というのでなく、全島花畑の幻というのでもなく、胸の奥のもっともひそやかな部分、自分という人間の存在の根のようなのもが土足で踏みじられ、穢されたような気がして、本能的に反撃に出ずにはいられなかった。見知らぬ敵への憎悪が、黔々と膨れあがった。

浩三は、次の日から毎日畑の見張りに出ることにした。あんな仕返しをして、敵の男がそのまま引き下がるはずはない、近いうちに必ずまた川原にやってくる、今度は浩三の畑全部を打ち壊しにかかるにちがいない、そのときに出て行って勝負をつけたるんや、と気負っていた。

夜も寝つきが悪く、会社にいても落ち着かない日々が続いた。五時半の終業を待ちかねて川原に急ぎ、とつぷりと日が暮れるまで腹の空くのも忘れて茂みのかげで見張った。それだけでは安心できず、出勤前にも早めに家を出て畑の無事をたしかめた。大将の姿を見かけた。以前のように真っ青の冠頭衣を着て、女を従え、怒鳴りながら精力的に動き回っていた。それを見ながら、いっそ大将に川原の畑の危機を訴え、敵の撃退に協力してもらおうか、とも気持ちは動いたが、それはいい出しにくいことだった。

毎日毎晩、浩三の頭は敵のことといっぱいだった。仕事でも食事でも、憑かれたようにその見も知らぬ敵への憤怒の感情から逃れられなかった。それがどんな男なのか、いろいろな想像にとらわれた。どうせあんちっぽけな川原の一隅でござかしいことをする程度の奴やから、とるにたりん小悪党にすぎん、と思えた。けれども日時が経つにつれて、あんな非道なことを平気でやってくる奴や、もしそいつが自分より若くて体力に勝っていたら、と相手の幻影はふくらんでいき、そう恐れにとらわれると、何かで自分の身を守る必要があると感じた。そこでは妻には知られないように小ぶりの刺身包丁を一本買い、布に巻いていつも肩掛けバッグの底に入れて持ち歩くことにした。相手を刺すつもりはない。しかし脅しには使えるやろう。

そうしていつもバッグの底に包丁をしのばせて勤めに出、街を歩くと、浩三は年がいきもなく何か自分が急に強い者になったような気がした。中学生のころ、グループ同士で喧嘩をするのに、オモチャを改造した空気銃を手に入れた時と同じ気分だった。家で一人の考えに耽っているとき、「あんた、このごろようすがおかしいわ。どしたん」と幾度か美江に咎められたが、いいかげんにあしらった。

そんなある日、浩三は会社で突然、解雇を宣告された。

昼休みに浩三が食事を終え、休憩所で同僚の一人と将棋を指していると事務の女の子がやって来て食品部長が呼んでいるという。そのときも、おのずと盤上の相手の玉を敵と見立てて闘志を湧かせていたところだった。部長などから声がかかるのは珍しかったが、浩三は何のもの思もなく事務所の方へ行った。もうクーラーの入っている事務所の中では、若い人たちは携帯に向かったり、パソコンで遊んでいたりしたが、制服にネクタイの食品部長は同じ恰好の中堅社員とやはり将棋を指していた。すぐ浩三に気づいて、

「おお、門口はん。ちよっと待ってや。もうすぐ敵さんが音をあげるところや」と愛想よくいう。

「部長、何ゆうてはりまんねん。部長の方こそ、風前の灯っちゅうところでしょうが」

と、相手の係長がねねばした声色で応ずる。まさか将棋のお相手に呼ばれたわけでもないが、と浩三が気楽なことを考えているうち、どちらが勝ったか、部長が立ち上がったきて、

「すんまへん、門口さん、ちよつと」と隣の接客室へ引き入れられた。

作業ズボンの汚れを気にしながら、勧められるままに浩三がやわらかいソファに腰を下ろすと、浩三と同年齢くらいのごましお頭の部長はタバコに火をつけ、ゆつたりした調子で、

「このごろ、どないですか、門口さん。もうここに入らはって、何年にならる？」と訊く。

「はあ。二年が過ぎたところです」

「はあ、もうそないになりますか。ついこないだ、来てくれはったと思とったのに」

部長はいつもの威丈高な調子を消して、あくまでやわらかい。浩三は嫌な予感がした。

「仕事ぶりなど、班長からよう聞かしてもろてますわ」

あの班長が自分のことをよくいうわけがない。こいつ、遠回しない方をしやがる、と浩三は癪に障ったが、ただ、

「はあ」と気の抜けたような返事をするしかなかった。部長は少し間を置いて、それから少し前屈みになり、案の定、

「あのなあ、門口さん。世の中の不況続きは先刻ご承知のとおりや。うちも内情は大変だな。役員会でも、思い切ったリストラせないかん、いうことになってなあ……」とようやく本題を切り出してきた。やっぱりそれか、と浩三は合点したが、意外にシヨックは少なかった。逆に、どういうわけか、こんな会社、いつでも辞めたるで、という思いがこみ上げてきた。で、なおいよいよどんでいるふうな相手に、

「首切りですか」と自分の方から核心に切り込んでやったものだ。

すると切り返しを喰らった態の相手は、

「いや、そういうわけでも……」と、慌てた。

「首なら首とはつきりいうてください。わたしも、前の会社では役付きになった人間です。事情はわかりますよ。それに、わたしの方にも、こんな会社、いっこうに未練はないですから、さっさと辞めたげましょう。はつきりいわはつたらええでしょうが」

そういう放ちながら、浩三は内心、どうして自分はふだんの自分にも似ずこんなに熱しているのかといぶかった。そして、ああ、あれやあれや、自分は今闘いの最中やからこんなふうに強く出てしまうんや。もつと自制したほうが身のためやぞ……と省みもしながら、しかしそう納得すると、目の前の部長が、まさかこの男がああのだらけでもあるまいに、敵の男と重なって見えてきた。それで自分から退く気にはなれなかった。自分は今、きつと気色ばんだ、鬼のような形相をしていることやろう。

ふだんはおとなしい浩三がいい募ったので、虚を衝かれたかたちで部長は顔から笑みを消し、一瞬たじろいだようだった。が、すぐに体勢を立て直して、今度はいかにも突き放した口調で、

「そうでつか。あんたがそこまでいわはるんやったら、早速辞めてもらいましょう。わたしとしては、パートでも来てもらうつもりやったんやが。しかたない、今日限りで辞めてもらいましょう。手続きは事務の方にゆうとくから、帰りに寄ってもらたらよろし」といってそっぽを向いた。

浩三は一つお辞儀をしただけで接客室を出た。すぐに後悔の気持ちも動いたが、パートで勤めるんやったら、こんなところにしがみつかんでもほかにええ口、あるやろう、ともかく今はそれどころやないのや、と強いて自分を納得させようとした。美江の渋い顔が浮かんだが、それも今は煩わしいだけだった。

翌朝、浩三はもう出社する必要がなかった。さすがにすぐには美江にはいいだしにくく、いつものように弁当を持って家を出たが、足が向いたのはバス停ではなく川原の畑の方だった。高台からの眺めに、浜の酒造会社のあたりも目に入り、すると何やら街全体がよそよそしく感じられた。それにしてもやれやれ、もうこれからは一日中畑の見張りができるけっこうなご身分と相成りにけり、というわけや、と多少自嘲気味のつぶやきも出た。

前の日曜日からもう五日も経つのだが、どうしたことか敵さんはいっこうに姿を現さない。浩三の留守に畑に立ち寄ったような形跡もなかった。自分のすさまじい反撃に恐れをなしてしても、もう諦めたんか、そんならそれで一安心やが……。

川原に人がけはなかった。午前中を、浩三は中の畑と自分の残った畑の手入れに費やした。中の畑の男はこのところまったく姿を見せない。野菜が取りごろになってもやって来ないし、姓ばかりは聞いているが住所は知らぬからそれを男の家に届けてやるわけにもいかない。

日が中天に昇ると、両岸を木々に覆われた川原にも強い光が満ちた。木陰で弁当をつかった後も休まず作業して、やがて快い疲れをおぼえながらごろんと木陰の、刈って積み上げてある草の上に寝ころんだ。やわらかな乾いた草からは日のおいが立ちのぼった。

川沿いにゆるい風が吹きぬけると、マメやピーマンの葉が揺れ、ナスの実が葉陰からこぼれててらてらと輝く。その隣にテッポウユリの幾本かとスイトピーが開花している。それら自分が小さな種や球根から育て上げた野菜や花たちの成長ぶりを眺めて飽きなかった人間の子供たちがそうであるように、彼らの一つ一つに表情もあり、短かいながらに歴史もあるのだった。

奥の畑ではアマリス・ダリア・グラジオラスのほか、キク科のハナワギク・ヤグルマギク・マーガレットなどが色鮮やかに整然と咲き誇り、まるで西洋庭園のようだった。そして、さかんに蝶が来ている。かろやかに楽しげに舞ったり、花に止まったりしている。

大将は総じてキクが好きらしい。浩三はキクは、とくに大輪のキクはあまり好まなかった。本土の花であって、島の花ではないという気がした。でも大将の鮮やかなみごとな花畑を眺めながら、秋からはまた花を多くしよう、と思う。花がいい。フリージアやユリがいい。花畑は心やすらぐ。蝶もたくさん来るし……。

蝶たちが舞う花畑は、やはり全島花畑の幻を誘った。目の中にその幻がゆったり広がっていくにつれ、身体がまるごとその風景の中にやさしく包みこまれていくようだった。どこまでも蒼い海、そこに浮かぶ平らかな花の島、のどかに群れ舞う蝶たち……ふと、身体の重みの感覚が消えていくようだった。何だか、ひどく若返って軽々と宙に浮かんでいるような気分だ。心地よく酔っぱらっているような、甘い夢を見ているような。死んでゆく時はこんな感じになるんやろか。

そうや。死の時にこそ、自分の魂はこの老いた肉体のクビキから逃れ出る。そして魂は、しばらくは妻や娘のそばをさまようとしても、やがてはるかな潮路を渡って故郷の島に帰ってゆくんではないやろか、かるやかに。そうや。その時にこそ、魂はほんまに自由になるんやろ。もう自分の身体とも意識とも関係なしに、無心に故郷の島の花畑の中で遊び回っておられるんやろう……。ああ、そういえば、子供の時分に聞いた島歌の中に、「人間の魂が蝶はべるに姿を変えて……」とかいう意味のがたしか、あったな。どんな歌詞やったんか……。

ああ、そうやったのか。死んだ者の魂はみな蝶はべるになるんや。島で暮して死んだ者も、島から遠く離れて暮して死んだ者も、みな蝶に姿を変えて島の花畑の中を飛び回るんや。昔もそうやったんやなあ。子供の時分に見た花畑の蝶たちはみな、昔死んだ島びとの魂の姿やったんや、御先祖たちの。すると、親兄弟たちの蝶も、今ごろ飛び回るとるやろな。自分が行けば、会えるんやろか。自分が飛んどると、そのうちにはまた美江の蝶も飛んでくるやろな。またうるさいことやで……。

涼しい木陰の草の上で、浩三はだいぶ長く眠りに落ちていたようだった。崖の上で団地の子供たちが騒ぐ声で目が覚めた。何か安らかな夢を見ていた。このごろの気の張りと寝不足ですっかり眠り込んでしまったらしい。まだうつろな目であたりを見まわすともう川原は日がかげり、木々の間の穴の中から見上げるような上空の光が色づきはじめている。

「よいしょ」と一声かけて身体を起こすと、また畑の手入れにかかった。もうそろそろ会社では終業時刻やな、しかし今ごろのこの帰っていきよると美江に不審がられるやろな、まだ少々早いわな。美江には今日もナスを挽いでいってやろう。無法者に荒らされた所は、しかたがないからそろそろ秋の植え付けのための地ごしらえでもするか、などと考えながら手を動かしているとすぐ集中できた。ほどよい光と風の中で一眠りしてさっぱりした気分だった。

そうしてまた一時間ほども精を出し、中天の雲が夕焼けて川原に闇がたまってきたころ、

畑に屈まっていた浩三は、背後に何やら気配を感じてぞっとした。振り返ると、身体に濃いかげをまといつけた何者かが、まっすぐに浩三の方へ足早に押し寄せてくる。本能的に、それがあの待ち続けていた敵だと浩三にはわかった。だが、そうはわかってても、とっさのことで身体は金縛りにあったように動かない。蛇に睨まれた蛙みたいやないか、と変に自分を冷静に観察していた。

かげはたちまち目の前に大きく立ちほだかり、そして、ああそいつが足を持ち上げてきたなど思ったときにはもう小柄な浩三の身体は弾かれて、もろくも野菜の上に突っ伏していた。何度か足蹴にされた。敵は少しも声を発さなかった。いや、さかんに罵声を浴びせていたような気もするが浩三の耳には聞こえなかった。浩三は唸りわめいた。「ここはわしの畑じゃ。大事なわしの畑じゃ。おまえ、誰や……」。しかし声になったかどうかはわからない。襟首をつかまれ、上体を無理に引き起こされ、顔を数度撃たれた。鼻血がほとばしった。その鼻の先で邪悪な目が不気味に光っている。それが人間のものでない、何か子供のころ昔話に聞いた妖怪の……という思いとともに、浩三は意識を失った。

その夏は梅雨が長引いた。七月の下旬にもなつてようやく梅雨明け宣言が出されたと思つたら、八月上旬には迷走台風の影響で何年ぶりかという豪雨に見舞われ、河川が溢れた。

九月下旬のある日、浩三は重たげなりユックサックを背負つて、自宅近くの川沿いの道をゆっくり登っていった。ゆるいカーブを描きながら高台の住宅地の方へと伸びるその道の途中から振り返ると、くつきりした白い街の向こうに、秋らしく海の色が深まっていた。

歩道のそばを、バスが一台、また一台と音を響かせながら走り下りていく。そのバスの終点の停留所が見えるあたりで、住宅地の前を東に折れ、しばらく進むと、砂防ダムが造つたいくらか広い川原に出る。両側には山が迫っている。八月の豪雨の後には厳しい日照りが続き、今も水量は乏しかったが、水流の周辺にはクレソンやスキが繁茂していた。夜の冷えるようになったこのごろでも、週末にはキャンプに来る人があるのか、焼け焦げた石のサークルがあちこちに残っている。そこも通りすごして、浩三はさらに奥の方へと進んでいく。

八月の豪雨のときには、雨が上がった後、例の川原へ、あの事件以来初めて足を延ばしてみた。川原は水浸しで、畑は全部押し流されていた。浩三の畑があった所はもちろん、中の畑も、いつもみごとな花を咲かせていた奥の大将の畑も、すべて見るかげもなかった。あの男が、その後浩三の畑をどうしたのかは知らぬ。しかし、一面濁流に覆われているのを見て、ざまあ見る、いい気味や、天罰や、と思った。そのうえ、最近その川原付近の改修計画が公表され、そのあたりも数年のうちには他の場所と同様、味気ないコンクリートの川になるようだった。対岸に鬱蒼と茂っている森も、ある短期大学の校舎が建つとかでまもなく消えてしまう。あの無法な男は、意に反してもうそこに畑を作れないのだった。

浩三自身は、酒造会社を辞めて以来、家でぶらぶらしている。そのうちまた勤めなければ、と新聞やチラシの求人広告には毎日目を通すが、浩三のような高齢者を求めている広告にはまずお目にかかれない。美江が嘆いて、自分のパートの量を増やそうかといひ出したりするが、まあ待て、そのうちに何とかするからと話している。といって、別に当てるわけではなかった。土いじりができる仕事かと思ひ、市内のいくつかの造園会社に当たってみたが、「アルバイトならともかく、そのお歳ではねえ」と即座に断わられた。「草花や土や肥料の知識なら、多少ありますよ」と売り込んでみても、「どこで習われましたか」と問ひ返されて、まさか川原の畑でもいえず、「貸し農園で」と恰好よく答えたつもりでも、「ああ、その程度なら」と相手にされなかった。「最近、そういう人が多くて」と、邪魔なようにいわれたこともあった。

川原の奥は、また一つの丈高い砂防ダムが突き当りになっている。そのダムの下手に、草に囲われて四坪ほどの、畑らしく仕立てたところが見える。浩三が夏から何週間もかけて、山土を掘り起こし、石を除き、表土を入れ、肥料をやつてようやく畑らしくしたものだ。登山道からは外れ、ダムのそばではあるし、ここならあまり人目につかない。それについて、土質はともかく、土の湿り気や日当りはさほど悪くない。

その日、浩三はそこに初めて種を播くつもりだった。まず手はじめに、直播きの二年草だ。一晩水に浸してきたビスカリアとカスミソウとワスレナグサの種がリュックサックに入っていた。来年の春から夏にかけて、ここにまずカスミソウとワスレナグサが可憐な花を咲かせるだろう。その花畑を想ひ描きながら、浩三は土を起こし、持参の表土を入れ、水で湿し、それから注意深く細い畝を作つて種を播いた。播きながらふと、五年来花を咲かせてきたあの川原の畑が思ひ出された。そして、目前に立ちはだかつて威圧するダムの壁を気にしながら、やっぱりあの畑はよかつたなと思つた。もうここでは、あの大将に褒められたようなできのよい花は作れんかもしれんな、こんな不便で、川原石のごつごつしているような所では。それに、野菜を作ればたちまち猪にやられてしまいそうや。しかし、自分はここに種を播く、播かんではおられんや……。

全島花畑の幻が、またよみがえつてくる。すると目頭が熱くなつた。幻はどこまでも幻でしかないような気がした。顔が歪んでゆき、涙があふれた。しかしそれでも浩三は、袖で目のあたりを拭いながら少しづつ種を落としてゆく。そばでスキの若穂が日にきらめき、川原を風がさかんに吹き抜けていった。